

「師走」は、陰暦12月の異名です。節気では、「大雪」—天地の陽気が塞がり、真冬が訪れます。「雪曇」の日がやってくる頃。「(ふろふき)大根」「ねぎ」(葱)「にら」(韭)、「ぶり」(鰯)「さけ」(鮭)などが旬となります。「針供養」(12月8日)、世田谷の「ボロ市」、浅草の「羽子板市」などが風物。そして「冬至」(12月21日)—一年でもっとも昼が短く、夜が長いころ—と同時にこれからは日が伸びていくことで、古代では冬至が一年の始まりでした。この日は、柚子湯で体を温めて「湯治」と洒落てみましょう。体を柚子の香りや薬効で清める「禊」の意味もあるようです。また、この時季の旬の食材には、「まぐろ」(鮪)「こい」(鯉)、「かぼちゃ」(南瓜)「ゆりね」(百合根)など。でも、かぼちゃは、本来夏が旬の筈…、冬至には「ん」のつくものを食べると「運氣」が上がると言われているのですが、「南瓜」は、「なんきん」で「ん」がついています！保存が効く「南瓜」は、栄養豊富で風邪を引かない冬の食べ物なのです。「大根」「人参」「ピーマン」「蓮根」「鼈」(すっぽん)「蜜柑」など「ん」のつく食物を、「うん」(たくさん)と食べましょう！

12月は、ほかに「クリスマス」の行事やお正月の準備やらで年末は気ぜわしい中にも、新年を迎える喜び、希望があり、春迎えの時候でもあるのです。このころ、天球—太陽と月はカップルとなって天空に同時に見えます。「東の野に かぎろひの立つ見えて かへりみすれば 月傾きぬ」(『万葉集』巻一：柿本人麻呂)と詠われている光景は、まさにこの時季、夜明けの西の空には「月亮」が、そして東の水平線には赤々と「太陽」が昇る天球ふたつ、宮沢の坂上がり与中国大連で目の当たりにしました。11月末～12月初の朝方(七時～八時ころ)の天空…すでに遅し！かも…また来年！

さて、今回のトピックス—は、地元の鎮守さま—「福島神社」の灯籠(一対)です。社殿正面の両脇にある石灯籠—「念仏供養」のために奉納されたようです。その右手の一基には、「牛頭天王」「蔵王権現」、左手には「秋葉大権現」「榛名大権現」と彫られているのをご存知でしょうか—それぞれ「**ござてんのう**」「**ざおうだいごんげん**」「**あきばだいごんげん**」「**はるなだいごんげん**」と読みます。これらの天王や権現様は、どのような神様なのでしょう—「権現」は仮の神さまですが、天王？—しかも、「牛頭」とは一体、恐ろしい名前ですね。簡略に説明しますと、この神さまは日本の各地において、千年以上も疫病除けの「お守り」として大事にされてきた「蘇民将来」との関わりがあります。蘇民将来の信仰が八世紀までにすでに日本に入ってきて、行疫神、疫神、疱瘡神などいわゆる疫病神の祟りや怒りから自分や家族の身を守ろうとした、素朴で単純な信仰です。土着的で、しかし異国渡来の「異神」性のある神です。**茅の輪**や**鯛の頭**を**終の葉**とともに**玄関に飾る**風習は、今でも魔除けの呪物です。牛頭天王は、インドの祇園精舎にまつわる神で、ヒンドゥー教では牛を聖なる動物として決して食べません。そして古く、この福島の村は疫病が流行ったそうです。石灯籠には「文政十三年庚寅二月吉日」と刻まれており、1830年に奉納されたことが分かります。(江戸時代末期、吉田松陰が生まれ、3年後には天保の大飢饉があったころ)。神社の創建は、1532年頃(上杉謙

信・織田信長が生まれた天文年間-戦国時代)とされていますが、江戸時代の疫病に苦しんだ村人たちが灯籠を寄進して、牛頭天王に祈願したと考えられます。また、福島神社の祭神は日本武尊やまとたけるのみことですが、神道においては蔵王権現は日本武尊と習合し、同一視され、御嶽神社なども同様でした。鎮守の神さまを祀り、防疫(牛頭天王)や火防・火伏(秋葉権現)を願い、土や水の安全(榛名権現)など多くの災害・病気から身を護るために信仰されたことが、この灯籠から分かります(写真参照)。

今月の締めは、「冬至 陽生じ 春又来たる」—杜甫の七言絶句「小至」第二句より、【天の時も人の事も押し迫り】冬至になって陽気が生じて、春がまた来ようとしている—の意。冬至の後は、いちようらいふく陽来復、日一日と昼が長くなる—そんな春の気配を喜ぶ名言です。



《左=「牛頭天王」「蔵王大権現」、右=「秋葉大権現」「榛名大権現」》

今月のトピックス—【茅(かや)】のこと

《右:竹寺鳥居の【茅の輪】》→



茅は、屋根を葺く丈の高い草の総称で、ススキ、葦(あし・よし)、ちがやなどを言います。「茅葺」の屋根、また「茅野」市などは古代には茅がたくさん群生していた地であつたと思われます。なぜ、茅が呪術に使われたのでしょうか—『古事記』の天地開闢には、「天地初めて発けし時、……次に国稚く浮きし脂あぶらの如くして、海月なす漂へる時、葦牙あしかびの如く萌え騰る物によりて成れる神の名は、宇摩志うまし阿斯詞あし備比古かひひこ遅神ちのかみ。……」という行があります。これは、葦牙の神格化であり、つまり目には見えない混沌の世界から靈妙不可思議な働きによって、葦の芽のような物が生まれる、その本もとになる非常に生命力の強い神、不思議な力を持つ神さまです。その神の本となった茅(葦・ススキ)には、何物にも負けない強い神力が宿っているわけで、『備後風土記』が伝える蘇民将来の話での「茅の輪みこのをもちて、腰の上に着けよ」と詔りしたのは、茅の輪の防疫の効用でした。盆には、茅を採り、それを編んで縄にして飾り付けをする風習が、今でもここ福島の地域には伝承されている(小川裕介さんから聞き取り)そうです—「牛頭天王」は、意外と身近おわに坐すのです！(11月21日の「武蔵野三十三観音巡拝」、12月2日の「福島街歩き」参加の皆さんは、復習となりますのでご参考に！)

